



Characteristics of facial expression recognition ability in patients with Lewy body disease

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小島, 有里子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000253

論文内容要旨

しめい 氏名	小島 有里子
学位論文題名	レビー小体病患者の表情認知機能の特徴
概要 【背景】 医療者の表情は、患者を不安にさせたり、逆に元気づけたりと心理状態に大きな影響を与えることが知られている。Lewy Body Disease 患者の表情認識機能の特徴を明らかにすることにより、認知機能が低下する疾患患者における医療者 - 患者間の非言語コミュニケーションを円滑に進めるための留意点を検討することを目的とする。 【方法】 2016 年 3 月から 2017 年 7 月までの期間に、病院の専門医により、Lewy Body Disease である Parkinson's disease、Parkinson's disease with dementia、dementia with Lewy bodies と診断された 60 歳以上の外来患者及び入院患者あわせて 107 名を対象とし、“喜び”、“悲しみ”、“恐怖”、“怒り”、“驚き”、“嫌悪”の 6 表情の認識の特徴を調べた。表情認知検査結果をもとにクラスタ分析で類型化し、パターンごとの特徴を明らかにした。 【結果】 Lewy Body Disease 患者において、“喜び”は、加齢、発症年齢、罹患年数、認知機能、Apathy の影響を受けず保たれたが、“恐怖”の表情認識は困難であった。また、加齢、認知機能低下と Apathy の影響により、“悲しみ”、“怒り”の表情認識機能が低下した。クラスタ分析を行った結果、“安定型”“混合型”“低下型”の 3 つに分類された。“低下型”では“喜び”以外のすべての表情認識機能が低下した。“混合型”では、特に“怒り”の表情認識機能が低下した。 【結論】 Lewy Body Disease 患者において、正確に識別出来なかったいくつかの表情があった。その為、表情認知の特徴を踏まえた上で、介護者は、各タイプの患者に正しい感情を伝える手段として、表情のみならず言葉がけやボディータッチなどの方法で補う努力が必要である。	

※日本語で記載すること。1200 字以内でまとめること。

学位論文審査結果報告書

平成 31 年 1 月 28 日

大学院医学研究科長様：

下記の通り、学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏名： 20190116 小島有里子

学位論文名： **Characteristics of facial expression recognition ability in patients with Lewy body disease**（レビー小体病患者の表情認知機能の特徴）

本研究は、認知機能が低下する疾患である Lewy Body Disease（レビー小体病）の Parkinson's disease (PD), Parkinson's disease with dementia (PDD), dementia with Lewy bodies (DLB) の患者に対して、喜怒哀楽の表情（happiness, sadness, fear, anger, surprise, disgust）がどのような影響を与えるかを、表情認知検査で明らかにしようとした研究である。この研究結果によれば、Lewy Body Disease の患者で happiness の表情認知は障害されなかったが、sadness や anger に対する表情認知能力が有意に低下していた。先行研究には、6 表情に対する反応について、成人、健康老人、Alzheimer disease (AD) の間で比較した論文があるが、その中でも happiness に対する反応だけが保たれるという今回と同様の結果が得られている。従って、今回の表情認知機能の低下が、Lewy Body Disease 固有の特徴なのか、全ての Dementia の認知機能低下の一般的な特徴を表わしているのかを比較した追加研究が望まれる。また、データ分析は PD+PDD と DLB 間で行われているが、PD/PDD/DLB の 3 群での解析やあるいは、PD と PDD/DLB といった 2 群（Lewy Body Disease で、日常生活に支障をきたすレベルの認知症を伴う群と伴わない群）での解析は試みられていない。それらの解析も今後望まれる。さらに、年齢、発症年齢、MMSE を用いることで 3 つのクラスターを簡単に予測できるとしているが、今後の研究で確認する必要がある。

本研究は、Lewy Body Disease における表情認知機能の低下とその特徴を初めて明らかにしたものであり、日常的に表情認知能力の低下した認知症患者に接する時間の多い医療介護の現場対応に科学的な光を当ててるものとして、医療への貢献が大きいと考えられる。したがって論文審査委員の総意として、本研究論文は学位論文に値すると判断した。

論文審査委員	主査	矢部 博興
	副査	金井 数明
	副査	坪井 聡